

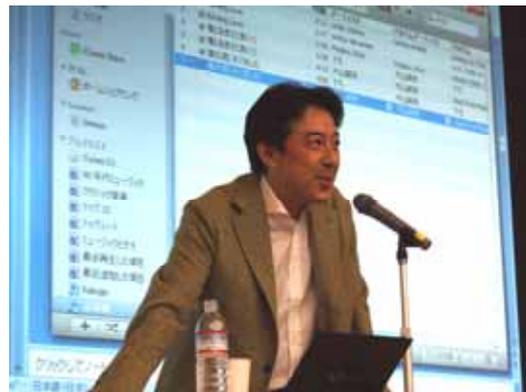
堀 一貴 (ほり・かずたか) 先生

株式会社ホリプロ 取締役副会長
社団法人音楽出版社協会

1983年、ニューヨーク大学卒(政治学専攻)。
電通に2年間務める。

1986年、大洋音楽(株)入社。レッド・ツェッペリン、ジョージ・ハリソン、ヴァン・ヘイレン、ヘンリー・マンシーニ、カーペンターズ、パーシー・スレッジ、カーリー・サイモン等の楽曲のプロモートに携わる。

1990年、(株)ホリプロ取締役に就任。米国法人HoriPro Entertainment Group, Inc.を通じキッス、REO スピードワゴン、ジェリー・リード等の著作権の買収や作詩・作曲家の育成を手掛ける傍ら、中国、韓国での事業等国際ビジネスを専門とする。



現在の役職

- ・(株)ホリプロ 取締役副会長 ・HoriPro Entertainment Group, Inc. CEO
- ・大洋音楽(株) 代表取締役会長 ・WHDエンタテインメント(株) 代表取締役社長兼CEO
- ・社団法人音楽出版社協会 副会長 ・社団法人日本音楽著作権協会 理事
- ・社団法人著作権情報センター 理事 ・日本経団連評議員

〈講義概要〉

本講座の寄附団体のひとつである社団法人音楽出版社協会の副会長として、また総合エンタテインメント企業である株式会社ホリプロの取締役副会長として、エンタテインメント業界の最前線でご活躍中の堀一貴氏が、音楽出版ビジネスについての講義を行った。

講義ではまず、自身の経歴やホリプロの事業について、エピソードを交えながら話した。その後、著作権に関する基本的な考え方やアメリカの音楽出版社について説明の上、著名人が出版社になるしくみについて、ビートルズの著作権を例に具体的に解説。音楽のビジネスとしての側面を伝えた。

さらに、デジタル音源の氾濫やWinny判決、360°ビジネスなどにも触れながら、今後の音楽出版ビジネスの課題を提示。音楽の本質を見失わずにその価値を守っていくために、著作権についてきちんと把握し正しく利用することが重要であることを強く伝えた。

また、新たなビジネスモデルとして、パッケージ・ノンパッケージ・ライブを統合するという方向性を学生に提示し、音楽産業の展開を考えるきっかけを与えた。

〈受講生の感想〉

インターネット中心の世の中に変わりつつある中で、著作権問題と常に隣合わせな状態で、レコード会社は立場や居場所を守り続けなくてはいけないので、時代を理解し、合わせる所と変化せず守りぬくべき所のバランスが重要だと考えました。新たに求められているのは何かと分析することが、ビジネスには必要なのだとわかりました。

立命館大学・産業社会学部・1回生

講義中に先生が何度も口にしていた、「音楽に対するリスペクト」という言葉がとても心に残りました。たしかに今はインターネット技術の進歩により、海賊版などの偽物の音楽が世の中にあふれ、正規の音楽がどこかないがしろにされている気がします。便利さを求めるあまり、現代の人は音楽の本質を見失っているのかもしれない。音楽の真の価値を守るためにも、著作権ビジネスは音楽産業と切っても切れない存在であると思いました。

立命館大学・文学部・3回生

著作権とは、作った本人だけがもてるものだと思っていましたが、本人以外の人でもお金を出したら買えるということにとっても驚きました。音楽というと、聞くことをイメージしますが、楽曲自身の扱い方を勉強する必要があると思いました。

京都女子大学・現代社会学部・2回生

ひとつの作品を生み出すことによって同時に著作権が生まれ、ビジネスの手段となる著作権はとても魅力的ですが、使い方次第でどのようにでもなることは、ある意味恐ろしいことだと思いました。これから音楽ダウンロードなどの社会の変化によって、ますます重要になる著作権の話を今のうちから聞くことができ、いい経験になりました。

立命館大学・産業社会学部・1回生

日本とアメリカの著作権の扱い方の違い、音楽出版社の違いがよくわかりました。ビートルズの音楽には価値があると知っていましたが、「著作権に価値がある」という考え方はしたことがありませんでした。しかもその著作権も年を重ねるごとに価値が変わるなんて、目に見えないものなのに不思議な感じでした。

立命館大学・産業社会学部・1回生

何かが成功、または得をすれば、そのカテゴリにおける何かが欠けてしまう、または苦しみ、損をするという世の中の食物連鎖ならぬ不条理を感じました。情報化が日々進む世のビジネスの中で、生き抜くすべを見つけることが、更に難しい世の中になっていく“未来”をこの話で垣間見たような気がします。

立命館大学・映像学部・1回生

